

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 10 月 22 日現在

機関番号：35408

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25463535

研究課題名(和文) 父親の育児参加促進プログラムの開発と実用化の検討

研究課題名(英文) Development and Practical Utility of the Child Care Participation Promotion Program for Fathers

研究代表者

津間 文子(TUMA, Fumiko)

安田女子大学・看護学部・准教授

研究者番号：30572987

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：父親の育児参加促進プログラムの開発と実用化を検討し、家庭内における育児役割の均等化を図ることを目的とした。妊娠期から父親の育児参加へ向けてのサポート環境が向上できるプログラムを考案するため、まず、父親の育児参加のニーズと既存の父親の育児参加支援の実態を分析したうえで、プログラムを作成し、実施・評価を通して実用化を検討した。各調査結果の統合と並行し、参加型集団指導による養育行動の神経学的基盤を根拠にした「膝に抱っこして行う絵本の読み聞かせ」講座の1年後、研究協力者2組の母親の語りから父親の育児参加促進を確認できた。父親の育児参加促進プログラムにおいては支援実践モデルの必要性が示唆された。

研究成果の概要(英文)：This study developed a program to promote fathers' participation in parenting, and examined methods to put it into practical use, aiming for the equalization of parenting burdens in individual households. Based on the results of analysis on needs and currently available support for such participation, a program that helps fathers participate in parenting from the pregnancy period was developed, and its practical use was considered through trials and evaluation. While integrating the results of various surveys, a lecture with participatory group guidance for fathers to read picture books to their children was given, based on neurological findings on parenting behavior. After one year, interviews were conducted with 2 couples participating in the study, and the mothers' statements confirmed the promotion of the fathers' participation in parenting. To appropriately implement programs to promote fathers' participation in parenting, models for the provision of support may be necessary.

研究分野：生涯発達看護学

キーワード：子育て支援 父親 母親 主観的幸福感 KJ法 妊婦健診 地域子育て支援拠点事業 共同養育

1. 研究開始当初の背景

政策としての子育て支援は、1990年の「1.57ショック」が発端である。少子化対策から発生した子育て支援の問題点として、妊娠期からの連続性がなく効果に乏しいことが指摘され、妊娠期から産後の子育て期にわたる一貫した支援の必要性が提唱されている(古川;2010)。近年では、母親のみが子育て支援の対象でなく、父親もその対象となっている。「健やか親子21」第2回中間評価においても、さらなる父親の育児参加へ向けてのサポート環境向上の必要性を指摘されているものの、具体策はいまだに講じられていない。しかも、産後1か月までの父親の育児参加に関する研究は少ない。そこで、妊娠・出産・育児期に専門職による具体的な支援の結果、男性に自ら置かれた環境で父親としての自覚が芽生え、パートナーとともに主体的な育児参加が予想される。このことにより、しつけや教育に「積極的にかかわるべきだ」という意識をもつ父親が各家庭に応じた子どもの世話をすることは、よい夫婦関係や育児の充実および母親の育児負担の軽減につながる育児参加の実現であり、男女がともに親として育児役割を担うことが期待できる。

父親になる男性の意識は、総理府による「男女共同参画社会に関する世論」(2000)によると、父親が家庭で子どもの世話、しつけや教育に関わるべきとする男性は約93%で、そのうち「積極的にかかわるべきだ」とする者が41%で、「積極的に」の意見が若い年代ほど多く20代では55%と過半数であった。それが、2012年版「子ども・子育て白書」(2012)では、週60時間以上の長時間労働をしている割合は30歳代が最も高く18.4%であった。また、子育て中の女性の86%が働くことを望んでいることを報告している。このことは、「積極的にかかわるべきだ」という意識をもつ男性が父親になる可能性がある時期は、経済のグロー

バル化や社会環境の変化により、夫1人の賃金で家族の生計を支えることが難しくなるものと考えられる。しかも、女性も家計を支えるために働くことを希望すると、男性も家事や育児能力を身に付けていく必要性がますます高まるにもかかわらず、週60時間以上の長時間労働に阻まれている。

さらに、子育て期の母親は、夫や実母を頼りにしているものの、夫への苦慮感とともに専門職の支援について、特別な一時的なものと捉えている(古川;2010)ことも指摘されている。そこで、父親の体験や思いなどを父親に直接聞くことでニーズが明確化され、専門職による支援があることで、家庭内における育児役割が均等化していくものとする。

2. 研究の目的

父親の育児参加促進プログラムの開発と実用化を検討し、家庭内における育児役割の均等化を図ることを目的とする。そこで、妊娠期から父親の育児参加へ向けてのサポート環境が向上できるプログラムを考案する。そのために、父親の育児参加のニーズと既存の父親の育児参加支援の実態を分析したうえで、プログラムを作成し、実施・評価を通して実用化を検討する。

3. 研究の方法

研究の第一段階として、(1)父親の育児参加のニーズに関する基礎調査、(2)既存の父親の育児参加支援の実態に関する基礎調査、(3)父親の育児参加に関連する国内外の文献調査の分析結果より、父親の育児参加プログラム導入の検討を行う。最終段階として、具体的なプログラムを検討による(4)父親の子育て参加プログラム試案、(5)父親の育児参加プログラムを作成し、実施・評価を通して実用化を検討する。なお、本研究は、筆者の所属する大学(当時)の倫理審査委員会の審査を受け、承認を得ており、調査に当たっては、口頭と紙面で了解を得た。前述の段

階別に、以下の5つの研究を行った。

(1) 父親の育児参加のニーズに関する基礎調査

保育所を利用している父親・母親の質問紙調査

対象者：子どもの出産を控えた父親と母親、就学前の育児をしている父親と母親
調査方法：保育所・事業所等に委託して子育て中の父親と母親に対する質問紙調査を留め置き法にて行った。なお、実施前にプレテストを10名で行い、調査票を検討した。

調査内容：父親・母親の属性（年齢、健康状態、就労の有無、同居の家族構成）、父親のいきがいの指標として「主観的幸福感（PGC モラール 17 項目）」、父親の育児参加の確認のために「子どもの数」「家族の人数及び同別居・親近性」。主観的幸福感については、使用の許諾を得た。

分析：単純集計後、主観的幸福感得点と父親・母親の各項目について Mann Whitney の U 検定、Kruskal Wallis 検定による群間比較を行った。統計解析には統計ソフト SPSS Ver. 21 を使用した。

妊娠期からの育児参加に関する父親の半構成的面接

対象者：子どもの出産を控えた父親、就学前の育児をしている父親

研究対象者の募集：ネットワーク機縁法により研究対象者を募った。

面接調査：インタビューガイドに沿って半構成的面接を行い、許可を得て録音し逐語録を作成した。

分析：逐語録から、父親の育児参加に対するニーズを抽出し、内容分析を行った。

(2) 既存の父親の育児参加支援の実態に関する基礎調査

子育て支援として父親の育児参加を促進する先進事例の調査

育児期の子育て支援を実施している専門職4人（保健師、助産師、保育士、栄養士）に対する半構成的面接を行った。

先行研究を基に、実践している父親の育児参加支援の詳細と、実践を通して見えてくる父親の育児参加支援の課題等を把握するためのインタビューガイドを作成した。

面接調査：インタビューガイドに沿って半構成的面接を行い、許可を得て録音し逐語録を作成した。

分析：逐語録から、子育ての実態と支援に関するニーズを抽出し、内容分析を行った。

(3) 父親の育児参加に関連する国内外の文献調査

看護および周辺領域における父親の育児参加促進に関する文献を検索し、父親の育児参加支援へのプログラム導入を検討した。

(4) 父親の育児参加促進プログラム試案の作成および実施

プログラム試案は、(1)と(2)のデータの二次分析および(3)の結果を統合し、日常的な養育を担うことが時間的に困難な父親が()「いつでも・どこでも」できる、()育児技術を習得していなくても可能である、()子どもとの肌と肌の触れ合いによる神経学的基盤に基づく養育行動となる、()子どもの発達においては愛着と学習効果を有する、の4点に着眼した父親の育児参加プログラム「膝に抱っこして行う絵本の読み聞かせ」を、筆者自身が所属する大学で担当した地域住民向け講座で育児期にある「父親が稼ぎ手」、「母親が専業主婦」の親子2組に研究協力を依頼した。

プログラム試案の概略を図1に示す。

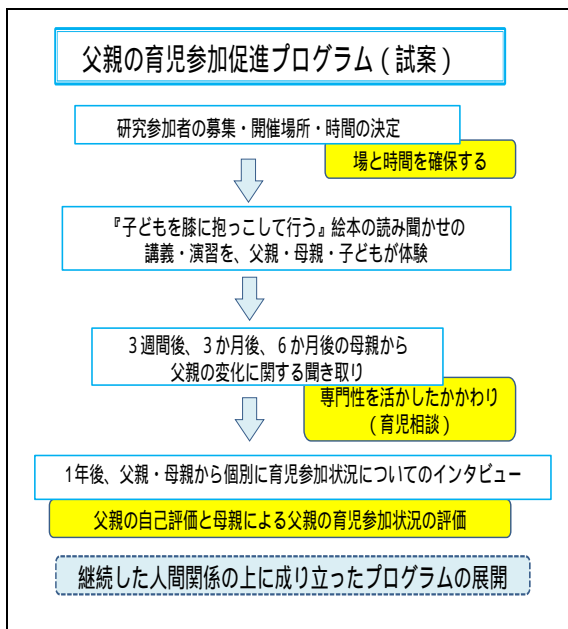


図1 プログラム試案の概略

4. 研究成果

(1) 父親の育児参加のニーズに関する基礎調査

保育所を利用している父親・母親の質問紙調査

備中・備後地方の保育所に委託して子育て中の父親・母親に対する自記式質問紙調査を留め置き法にて1752名に実施し、回答の合計は774名、回収率は52.9%であった。調査期間は、2013年8～9月。774名の妊娠中に体験した子どもに対する思いやかかわりと主観的幸福感の関連を分析の結果、父親・母親ともにスコア値が高かった、あるいは高い傾向がみられたものは、「子どもをもつことを希望していたか」、「妊婦健診」、「妊娠中の(妻への)(夫からの)サポート」、父親のみにスコア値が高い傾向がみられたものは「産前教室」であった。そこで、妊婦健診や産前教室への父親の同行の時間を確保し、父親に対する母親の期待するサポート方法の情報提供が有用であることが示唆された。

妊娠期からの育児参加に関する父親の半構成的面接

父親7名の年代の内訳は、20代2名、30代3名、40代1名、50代1名であった。年

代の高い父親の育児状況に特徴が大きく、育児と老親介護を同時に担う「ダブル・ケア」が両立できる子育て支援の必要性が見出された。少子高齢化社会において、父親に対する支援内容は単に母親の育児負担を軽減するのみでは不十分であることが示唆された。

(2) 既存の父親の育児参加支援の実態に関する基礎調査

子育て支援として父親の育児参加を促進する先進事例の調査

まず、地域子育て支援拠点事業『子育て広場』に通う母子の実態と4人が行う支援の実態について、データの検討方法としてKJ法を活用した。4人の子育て支援者からみた母子の実態と支援の実態からは、10の島のシンボルマークによって、不安定な育児をしている母親への支援が浮き彫りになった。現代において育児以前の【母親の未熟さ】が深刻であり、【盲目的・無自覚なメディアへの依存】や【いびつな母子関係】が醸成されていることに、支援者は強い危機感を抱いている。育児に自信が持てず、【不安定ながんばり】方をしてしまう母親もいる。そこで支援者として、【広がる・繋がる支援の輪が理念】で【タイムリーな連携】を目指しつつ、【子どもの生活力の向上】の視点でのかかわりや【父親の意識改革へのアプローチ】によって日常生活と育児環境を向上させることで、【母子の安心感を支える】【母親の“育自”を支える】重要性を認識していることが、図解から把握できた。職種の異なる参加者の意見を集約したことで、支援についての広い視点が得られた。それぞれの意見をミックスさせ、多角的な視点に立つことで効果的な支援に繋がると考えられた。

次に、4人の中で妊娠期から父親の育児参加促進を目指して先進的に取り組む助産師の実践を探究した。研究参加者は、助産師経験年数30年で、非常勤での産科医院の分娩介助、助産教育、看護教育及びつどいの広場

事業で母子の相談や育児支援の講座等を開催するという多様な職場とネットワークを構築していた。当事者の目線も持ち合わせた子育て支援者は、広場に来訪する母親の「子どもが生まれる前からの問題が潜んでいる」状況や「育児の問題の多くは知識不足から生じる」育児期の母親の負担を軽減する方法を模索している。子育てを「父親の育児参加に向けての新たな取り組みをする」こと、時には「母子関係のゆがみが母子の行動の特徴になる」ことから「虐待を含む重大な問題は行政につないで解決を図る」ことで「問題の発生を未然に防いでゆく」支援を行っている。「育児期に憩える場所を求めて広場に来ている様子がある」母子から「子どもの育つ地域の問題を感じる」ことが「憩いの場となる地域を目指す」へと繋がっている。あくまでも子育て経験を持つ当事者の目線で「今、この時の子どもを見てあげて欲しいと思う」気持ちで「支援により母親がしっかりしてくると子どもはすごくよくなると思う」と、「願いと期待を持って取り組む」活動が明確になった。助産師による地域子育て拠点事業における子育て支援が、父親の育児参加促進を期待できると考えられた。

(3) 父親の育児参加に関連する国内外の文献調査：英語圏の論文のレビューから、() パートナーシップの強化と一緒にペアレンティング教育がなされると効果があがるという一定の前提ができつつある、() 父親むけプログラムの効果を実証するにあたって、量的な研究だけでなく、質的に本人たちの語りの分析をエビデンスとして、効果の評価に質的方法を使用している例がある、() 妻にとって夫が努力する姿勢をみせられることによって、妻の満足が高まり、夫への印象が変わる可能性について、その効果の検証が必要である、といった示唆が得られた。

(4) 父親の育児参加促進プログラムの検討プログラム参加後のインタビューからは

「(講座による)効果を感じ促進された」「1年間で変化はないがポジションができた」とあり、肯定的な感情に依拠している内容であると思われる。何よりも、2人の研究参加者の母親が語る父親の育児参加は「積極的になった」であったことから「父親がケア役割を担える機会の促進」と判断できた。母親は、父親の育児参加が促進されたと回答しており、今回用いた「絵本」が、親子のコミュニケーション、それもスキンシップを促進するツールであったため、目に見える行動として有効であったと考えられる。そこで、妊娠期からの切れ目ない子育て支援の連携を構築するには、時間・場所・人材をつなぐ要となる支援実践者の存在を含め、企画構成を検討する必要が示唆された。

5. 主な発表論文等

学会発表 [計 8 件]

- 1) 津間文子, 岡本次枝: 稼ぎ手である父親における育児参加の内実 母親が希望する育児ができる子育て支援, 第8回全国看護管理・教育・地域ケアシステム学会学術大会, 口頭, 2014年7月, 福山市.
- 2) 津間文子, 橋本和子, 木下八重子, 田村美子: 40代半ばで初めて父親となった育児参加のプロセス 高齢化する父親に対する子育て支援, 第40回日本看護研究学会学術集会, 2014年8月, 奈良市.
- 3) 津間文子, 橋本和子, 林田馨, 木下八重子, 田村美子, 岡本次枝: 高年で初めて子どもを得た夫婦に対する子育て支援 育児と老親介護の両立, 第34回日本看護科学学会学術集会, 2014年11月, 名古屋市.
- 4) 津間文子, 林田馨, 橋本和子, 田村美子, 木下八重子, 清水暁美: 父親の育児参加促進プログラムの開発と実用化の検討 専業主婦をもつ父親2事例についての考察, 第1回 インターナショナル看

護哲学学術集会,2015年7月,福山市.

- 5) Fumiko Tsuma, 'Fathers' Life Course and Childcare Support in Japan How to cope with the Japanese life course model undergoing change', The ICM Asia Pacific Regional Conference 2015 (ICM APRC2015), 2015年8月,横浜市.
- 6) 津間文子, 林田馨, 田村美子, 木下八重子, 兒島佳子, 橋本和子: 育児期の主観的幸福感が高まる子育て支援のあり方 妊娠期に焦点を当てて, 第35回日本看護科学学会学術集会, 2015年12月, 広島市.
- 7) 津間文子, 兒島佳子, 平岡敬子: 地域で活動する助産師の子育て支援の取り組み 子育て支援実践モデルの構築, 第30回日本助産学会学術集会, 2016年3月, 京都市.
- 8) 兒島佳子, 津間文子, 平岡敬子: 地域子育て拠点事業『子育てひろば』における専門職の活動 子育て支援実践モデルの構築, 第30回日本助産学会学術集会, 2016年3月, 京都市.

研究論文 [計6件]

- 1) 津間文子 (2014): 日本文化と子ども観 子育ての支援, キャリアと人生観 8(1), 133-138.
- 2) 津間文子, 村上博美 (2014): 父親と母親が育児を共有できる子育て支援に関する研究 40代半ばで初めて子どもを得た父親のインタビューより, 看護・保健科学研究誌 15(1), 45-54.
- 3) 津間文子 (2015): 女性のライフコースの選択と祖母の力 少子高齢社会における子育て支援, キャリアと看護研究, 5巻1号, 18-27.
- 4) 津間文子 (2015): 「地域子育て支援」を担う専門職の実践に関わる一考察 地域子育て支援拠点事業において助産

師が担う役割と課題, インターナショナル Nursing Care Research 14巻4号, 39-49.

- 5) Development and Practical Utility of the Child Care Participation Promotion Program for Fathers: Comparing the Subjective Feelings of Happiness in Mothers and Fathers During Pregnancy, Fumiko TUMA, Kaori HAYASHIDA, Kazuko HASHIMOTO, Keiko HIRAOKA, (2016) インターナショナル Nursing Care Research 15巻1号, 1-12.
- 6) 津間文子, 名越恵美 (2016): 育児と介護を同時に担う母親の体験 - エンドオブライフにおけるダブル・ケア支援 -, キャリアと人生観第9巻, 23-28.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

津間 文子 (Fumiko TUMA)
安田女子大学・看護学部・准教授
研究者番号: 30572987

(2) 研究分担者

林田 馨 (Kaori HAYASHIDA)
安田女子大学・看護学部・講師
研究者番号: 10379688
橋本 和子 (Kazuko HASHIMOTO)
福山平成大学・看護学部・名誉教授
研究者番号: 70263978

(3) 連携研究者

平岡 敬子 (Keiko HIRAOKA)
安田女子大学・看護学部・教授
研究者番号: 30260673
木下 八重子 (Yaeko KINOSHITA)
安田女子大学・看護学部・准教授
研究者番号: 10521809

(4) 研究協力者

伊藤家生 (YAYOI ITOU)
NPO法人「ほっとはあと」代表